

年男としての感想は？ と言われても



旭川市医師会
とびせ小児科内科医院

飛世克之

皆様、新年明けましておめでとうございます。年男として執筆のご指名をいただいたので、今考えていることを少し書いてみたい。文字は、考えていることを記録する方法としては、優れたものである。古来、文字は隋からの經典の漢字を模倣して始まったが、日本独自の平仮名、カタカナを作って日本語としての文字を確立した奈良時代の先人たちに感謝しなければならない。文字を残す媒体としては、竹簡、木簡、紙、磁気体、半導体などと進化してきているが、これらも100年、1,000年単位の保存に耐えられるか否かはわからない。墨で書かれた木簡は1,000年以上経ても読めるものもある。「舟を編む」ではないが、「広辞苑」「新明解」等の辞書も数年に1度は大変な努力で改訂されている。文字で記録することは、日記のように過去にはこんなことを考えていたのだと、その時の考えが分かり、自分でもそれにびっくりすることがある。今年乙未（きのとひつじ）だそうだが、私にとっては6回目の巡り合わせで、年男である。干支（えと）がもてはやされるのは、年賀状、お年始などの新年の一連行事のときがピークであり、桜が咲くころには、現代社会では今年は何年だったかの意識は薄れがちである。ただ、神社仏閣、茶道、華道、歌舞伎、能などのジャンルでは干支は大切に使われているのではと想像する。12年おきに巡ってくる年男・年女と言われても、日常生活ではその実感はあまりない。

そこで、干支の12年単位で自分の過去の出来事をさかのぼってみる。12年前の平成15年(2003年)には60歳、いわゆる還暦である。当時、国立療養所札幌南病院院長として単身赴任していたこともあり、札幌のレストランでお祝いの会をやってもらった。娘夫婦から赤いカーディガンがプレゼントされた。中国では古来赤色がめでたい色であり、幸せを呼ぶそうである。誕生日の前の平成15年10月31日から2日間、新装なった札幌コンベンションセンターで「第58回国立病院療養所総合医学会：国立病院・療養所の新たなる出発-独立行政法人化に向けて-」の学会長を努め、全国145の施設から3,000人あまりの参加者をお迎えした。2日間ともアイスクリームが食べられる位の快晴に恵まれ、発表内容・運営も充実したものになり、成功裏に終えている。独立行政法人国立病院機構発足前年のことであった。その12年前

の平成3年(1991年)には48歳、旭川医科大学医学部第一内科助教授、その12年前の昭和54年(1979年)には36歳、旭川医科大学医学部第一内科講師・外来医長であった。さらに、その12年前の昭和42年(1967年)には24歳、福島県立医科大学医学部の5年生であり、その前は小学校5年生であった。この12単位の物差しで人生の断面像を見ると、子どものころから成人になるまでの変化は急伸であり、人間としての成長を示すものであろう。この断面像からみると、その経緯から成長は36歳から48歳がピークであり、5回目の60歳からは成長と言うより、むしろ退化し始めているのかもしれない。この変化は断面像で見えるからであって、1日単位1年単位で見ると、成長の変化は自分では分かりにくい。以前ある講演で、男性の人生の方向性は40歳くらいまでは変えられるが、それ以後は難しいという。一方、女性のそれは30歳前後であるという。性差からいっても納得できるものである。

それでは逆に未来、12年後の平成39年(2027年)の丁未(ひのとひつじ)の年、84歳の自分がどうなっているかの予想は難しい。もしかしたら、平成22年7月、定年後の66歳から始めた「とびせ小児科内科医院」で内科医をしぶとくやっているかもしれないし、体力的な問題で辞めているかもしれない。開業してみると、専門の呼吸・循環器系以外の領域の臨床レベルを上げる必要に迫られる。大学卒業のころ、内科鑑別診断学の授業では頭の先から足の先まで診るように教育された。今でも吉利和、沖中重雄先生の内科診断学を座右の書としている。今でいう総合内科学である。総合内科という領域も、この20~30年内科学の各領域が専門化し過ぎたため、新たに「分化から統合」という掛け声のもとで標榜されるようになった。確かに、糖尿病患者さんを診ても、糖尿病の診断、初期治療はガイドラインに基づいて行えるが、多くの合併症を持つことが多く、総合内科的配慮を必要とする。合併症としては、脳血管障害、狭心症・心筋梗塞、下肢閉塞性動脈硬化、感覚鈍磨・しびれ、糖尿病性腎症、ED、排尿障害さらには感染症、皮膚潰瘍、うつ病、糖尿病性網膜症等全身にわたる。それぞれの分野での臨床レベルを少しずつ上げて治療介入していきたいと思う。当院外来での新規の糖尿病患者さんの発見は、特定健診、胃腸炎や高血圧患者さんの血液検査等で見つかることが多く、自覚症状による診断はほとんどない。大した趣味もない身では、現在の診療自体が趣味という生きがいである。趣味というのは失礼なので、自分に果たすべき役割という気持ちで日々働いている。今後の目標は、一日一日患者さんの話に応えられるような仕事ができ、かつ川の流れのようなリズムのある心地よい生活ができれば、最高の喜びである。